

安田女子大学大学院紀要 第23集 2018
日本語学日本文学専攻

「夢見通りの人々」(第四章) 論——竜一と明美の物語——
A Study of Chapter Four of "The People of Dream Street":
the Story of Ryuichi and Akemi

藤 村 猛

キーワード：淫蕩・孤独・鏡・空虚

要 旨

「夢見通りの人々」第四章は、タツミ精肉店の竜一と娼婦・明美の交流が描かれている。竜一は幼いときの母の死から孤独であり、粗暴さから女たちに愛されない。だが、明美は彼に愛情を抱き、身をもって彼に彼自身を見せる。その結果、竜一は自分が廃墟との実感を持ち、明美と別れる。

この章は、淫蕩にして他者から理解されない孤独な男(竜一)と、そんな彼を愛する女(明美)の出会いと別れの物語である。

一 はじめに

「夢見通りの人々」第四章「肉の鏡」は、タツミ精肉店の息子たち（竜一・竜二）の紹介に続いて、章題に「肉の鏡」とあるように、竜一と娼婦・明美の交流が描かれている。

タツミ兄弟は、「性格は共通して粗暴で酒癖が悪」¹（46）く、「顔の造作といい背格好といい、双子と見まごうばかりに似てい」て、「兄の辰巳竜一は肌の色がどす黒く、弟の竜二は感情が激すると顔だけでなく首や胸まで朱に染まるので」（46）、兄は「黒牛」、弟は「赤牛」というあだ名だった。二人は夢見通りの住人から敬遠されていて、特に竜一は「もとやくざの組員」（11）として恐れられている。

だが、以前はともかく現在の兄弟は、やくざな商売から足を洗い、「改心して父の跡を継ぎ、兄弟仲良く肉屋を営んでい」²（46）て、家業（肉屋）の仕事に励んでいる。

二人の違いとしては、竜二は結婚できる（九章で結婚）のに対して、竜一は背中への刺青のため結婚できない（と竜一は思っている）。また、竜一は女子生徒を乱暴して高校を退学させられたり、やくざの組に入って事件を起こし刑務所に入ったりしたが、竜二には、「女友だちを妊娠させ」（83）るなどの問題はあっても、犯罪歴はない。

そういった二人の紹介があり、章の後半で、兄弟の淫蕩ぶり―彼らに自覚はないが、二人の異常な食欲や買春―が語られる。（描写の中心は、竜一である。）

ある日、兄弟は馴染みの愛人たちを訪れる。竜一の相手である明美は、昼間は会社勤め、夜は売春をしている女である。彼女は竜一を恐れながらも愛情を持っていて、自分の赤裸々な欲望を語ったり、自分の体を用いて彼本来の姿を見せようとする。それに対して、竜一は快感とともに罪悪感や空虚感を抱く。新潮文庫『夢見通りの人々』の解説者・常磐新

平氏は、「作者はこの兄弟の性格や過去をあばいて、それこそ『人間の基底部』に達している。そして、彼らの夢を無残にたたきこわしていく」と指摘する。²確かに、この作品では竜一の深部が描かれ、彼は自分の「基底部」に直面する。本稿では、竜一と明美の言動や関係を中心として、彼および彼女の本質を考える。

二 竜一——過去と現在——

竜一は十八歳のとき家を出て、南大阪にあるやくざの組に入り犯罪を犯し、三年間刑務所暮らしをした。その後、組を抜け、父親に謝って肉屋の家業を手伝うようになる。（彼は現在、二十六歳くらいである。）

彼は外見も性格も粗暴だが、三歳のとき母が急死したせいもあり、孤独であった。彼の「母」への思いや孤独な少年期の回想を、次に紹介する。

自分は母親の味を知らないのだ。弟はその乳すら飲んでいない。その件に関して、弟と語りあったことはないが、弟と自分が粗暴なのは母やそれに代わる女の手で育てられなかったからだ。竜一はそんな気がしてきた。（96）

彼は小学生時代から体が大きく腕力も強かったので、よく同級生を泣かせたものだった。家の近くで遊んでいて、友だちとケンカになったこともあった。泣きながら逃げて行く相手を追いかけて行き、その子が母親の懷に抱かれるのを見て、夜遅くまで家に帰らなかった日のことが鮮やかに甦った。（97）

以上のように、彼は小さいときから孤独であり、彼の粗暴さの一因は母の不在による。その後の彼も孤独であり粗暴さは治まらず、かつ、淫蕩になる。淫蕩さは彼の体力や性格故もあろうが、遺伝的なものも関与しているようである。

竜一の父親は「小心で吝嗇な」³（80）人物だが、息子たちに父親としての情を持っており、例えば、足を洗いたいという竜一の刺青を見て泣く、普通の父親である。対して、竜一の祖父（辰巳常男）は働き者で子ぼんのうな男だったが、性

欲が異常で、(竜一の祖母であった)「母は耐えかねて、子供を置いたまま行方をくらました」(83)ほどであった。(詳細は省くが、父親は祖父の異常な姿を思い出し、不能になった程であった。)祖父譲りの異常な性欲が、竜一たちにも伝わっているようである。

そんな竜一が初めて女を知ったのは、高校二年生のときであり、「相手は隣の八百屋の娘」(97)であった。彼女はそれまでに「不純異性交遊とかで二度補導された前歴の持ち主」(81)で、実際は彼女から誘ってきたのに、「辰巳竜一という不良学生に乱暴された」(98)と嘘をつき、竜一は高校を「退学」(81)させられる。

同じように、やくざ時代に刑務所に入った犯罪も、何らかの事情があったのかもしれない。後に、彼は明美との会話で「せえへんかったんは、人殺しぐらいのもんやなア」(90)と言っているが、彼はどこかで犯罪(特に人殺し)を避けていたのかもしれない。それは、彼の次の回想からも推測される。

そういえば、これまで相手を殺すつもりで撃った弾も、思い切り突き出した出刃包丁も、なぜかかすりもしなかったなと思った。(91)

ひよつとすると竜一は、粗暴だとしても暴力は好きではないのかもしれない。そうでなければ、彼がやくざから足を洗った理由が分かりにくい。(それだけ、彼の更生は突然であった。)

彼が三年前に父親の元に帰ったとき、父親の「なんで急に、真面目に働く気になったんや」(86)という問いに、「真面目に働きたうなったんや。なんでやて言われても答えようがないわ」(87)と答え、やくざの仕事は「もういやになったんや」(86)と言う。彼が組を抜けるとき、かなり苦労したようである。(弟の竜二は、「女のひもとして生きるのに耐えられなくなった」という理由であった。)

すぐには二人の言葉が信じられなかった父親は、竜一たちを一晚中、正座させる。二人は正座を続け、父親は彼らの姿

に納得して、二人を受け入れる。

その後、兄弟は真面目に働き、「人相が悪く、口の利き方も乱暴なのに、店が繁盛」(80)する。「商売に関しては決してあくどくなく、むしろ他の肉屋やスーパーマーケットよりもはるかに良心的だった」(80)ためである。しかも、兄弟は「客を満足させているということへの歓び」も感じている。この時点で彼らの粗暴さは、ある程度抑えられていたのだろう。

しかし、こういった彼らの良さ(更生)は他人には分かりにくく、周囲の目は冷たいものであった。彼らの悪評は広まり、尾鰭がついてくる。例えば、六章で光子が聞く兄弟の噂は、

(前略) あたかも兄弟が血も涙も持ちあわせていない人間だと思わせるものばかりだった。女と見れば陵辱し、人殺しなどは朝めし前で、他人の弱味につけこんでダニみたいにくらいつく等々である。(129)

以上のように、竜一たちは周辺の人々から、実態以上に悪人とされている。それは竜一にも分かっていて、六章で竜一は光子に、「昔のことは、そのうち消えてしまう。ちよつと前までそう思ってたけど、そんな甘いもんやないっちゅうことが、ようやくわかつて来てなァ。」(139)と、しんみりと語る。

実際に竜一たちを一般人と違わせているのは、その外見や粗暴さとともに、祖父譲りの性欲の強さや竜一の刺青である。それらが彼らを孤立させ、彼らの虚像や「グロテスク」さを印象づけている。(竜二は刺青がないためか、後に結婚する。)

三 竜一と明美

第四章は、次の文章から始まる。

タツミ精肉店の兄弟は、自分たちがともどもに放埒であることは自覚していたが、いかに淫蕩であるかは気づいて

いなかった。兄弟は四六時中性欲の沼の中にひたり、かろうじてその顔の半分、やっと息が出来る程度に鼻の穴を外
氣に向けているような人間だった。しかし兄弟は、男も女もすべてがそうなのだと思っていたのである。(79)

これらの文章は当たっている部分もあるが、外れている部分もある。例えば、彼らは「四六時中性欲の沼の中にひた」
っている訳ではなく、週に一二度、女を買う程度であり、父親は「女を買いに行くのを、逆に安堵の思いで見」(81)て
いた。つまり、彼らの性欲はコントロールされていて、世間の悪評のように、「女と見れば陵辱」(129)する訳ではない。
もつとも彼らは普通人よりは淫蕩であり、「それぞれ特定の女にいれあげてい」(87)て、彼らの「性欲を満足させるには、
とても二時間や三時間では済ま」(88)ないのも事実であった。

そして、彼らの性欲が昂じ、女を買いに行くとき、彼らの食は人並み外れたものになる。「女を買いに行く日、必ず自
分たちの考案した牛の肝臓料理を腹いっぱい食べる」(79)。牛の肝臓を血抜きして、「大蒜ごと生で食べる」(79)のであ
って、普通人の食の域を越えている。

彼らはその日も、「井飯に飯を盛り、大蒜をまぶした生のレバーで夕食をと」(87)り、よそ行きの服を着てタクシーに
乗り、愛人たちの住む住吉区のマンションに向かった。

竜一の相手は明美であり、竜二の相手は節子という女であった。竜二は以前から女の交換を提案していたが、竜一は渋
っていた。彼は淫蕩であっても、女に対して普通の情を持っていて、明美に「妙に魅かれてしまって、自分でも不思議に
思」(89)っていたのである。

別段、肉体の技巧に長けているわけでもなかったし、とびきりの美人というわけでもなかった。昼間は何食わぬ顔
で会社勤めをして、夜は体売っているくらいだから、決して純情でもなく、貧しいわけでもない。本職の娼婦より
はるかにしたたかであるはずなのは竜一も心得ているのだが、どうにも魅かれるのである。(89)

彼が明美に魅かれる理由は、その後の二人の会話などから分かってくる。まず第一に、彼女は素直である。彼女は竜一に、背中の刺青への怖さを語る。

「私、刺青が怖いねん。あんたの背中にさわるの、いややねん」(90)

竜一は、他の女たちから怖いなどと言われなかったことに気づく。他の女たちは、竜一に本音を明かさなかったのである。

続いて明美は、「私、淫乱な顔をしてる？」と聞く。竜一が否定すると、彼女は次のように言う。

「私、あんたと寝るたびに、自分がいやになってくるねん。他の客と寝ても、そんなこと考えもせえへんのに……」

「どんな女でも、あんたら兄弟の顔を見たら身の毛がよだつわ。さかりのついた気色悪い動物みたいやもん」(91)
「さかりのついた気色悪い動物みたい」、これが彼らの性欲の異常さ(グロテスクさ)をよく表している。明美の発言に怒って、竜一は彼女の腕をねじ上げるが、明美は悲鳴を上げながらも、竜一によって「私がどんな人間かが」「だんだんわかっていく」(92)と言う。彼女は彼と寝ることによって、自分の淫蕩さに気づいたのである。それは、自分が竜一と同レベルになることでもあり、ある面では「身の毛がよだつ」ことでもある。

そして、「あんたの鏡になってあげるわ」(92)と言い、自分の身体をもって竜一の鏡になろうとする。ここには、彼女なりの竜一への覚悟(愛情)がある。

竜一は薄気味悪くなり、「もう二度とこの女のもとには来ないでおこう」(92)と思い、帰り支度を始める。そんな竜一に、彼女は自分の母のことを語り始める。

彼女の母は、亭主の留守に「何人もの男を引っ張り込んだ」(93)淫乱な女である。明美は母の不倫を金のためだと

思っていたが、「あんたが来るたんびに、それは嘘やてわかってきたんや」。「あんたみたいな人間は大嫌いやのに、あなたの体が一番好きやねん。死ぬほど嫌いやったお母ちゃんと私とは、おんなじ人間やったんや。あんたがそれを教えてくれるねん。」(93)と告白する。しかし、彼女は竜一が「大嫌いやのに、体が一番好き」で、性欲に溺れる自分を自覚するが、彼女の思いはそれだけではない。

四 明美と竜一—母—

彼女は竜一に、次のように提案する。

「私、あなたのおもちゃになってあげるし、あなたのお母ちゃんにもなってあげるわ」明美はそうささやいて、寂しく笑った。(93)

おもちゃになるとは、竜一の欲望を満たすために、自分も「淫乱」になることの覚悟であり、母になるとは、彼を受け入れ愛することの比喩であろう。それではなぜ、彼女は「寂しく笑った」のだろうか。彼女は竜一から、彼が「母親の味を知らずに育ったこと」(93)を言われていないが、どこかで気づいたのだろう。彼女は竜一の母になってもいいと思う。しかし、本質的に、母は「おもちゃ」になり得ない。だから、彼女は自分の言葉に背反するものを、即ち、不可能ではないにしても、自分の提案に矛盾を感じたため、寂しく笑うのであろう。(そしてそこには、自分たちの関係が金の上に成り立つものの、売春だとの自覚もあろう。)

対して竜一は、「淫乱のお母はんか……」と呟く。彼はどこかで「母」を求めていたろうし、仮に母が淫乱だとしたら、自分の淫乱(や罪)も許容されるかもしれない。そういう願いが彼にはあったのかもしれない。(もちろん、淫乱さと「母」は相反するイメージである。後に竜一は父に、母は淫乱だったかと聞き、きつく怒られる。)

明美は竜一を性的に挑発し、彼はそれに乗る。やがて情事が終わり、明美が部屋を出た後、

竜一は窓のカーテンをあげ、街の灯を見た。ちえつと舌打ちし、壁を思い切り蹴った。彼は母と交わったような気がしたのだった。それは何人もの娘を犯したときよりもはるかに罪の意識が重く、快樂はその何倍もの烈しさで持続したのである。

彼は、写真でしか見たことのない母の顔を心に描いた。そんなことをしたのは何年ぶりかで、竜一はもしかしたら、母は明美が自分で言ったような淫乱な女だったのではないかと考えたりした。そういう想念とか思考のための能力は、竜一にはつかのましか駆使出来なかつたので、彼の心には得体の知れない後味の悪さと、生まれて初めての懺悔の感情だけが残った。(95)

竜一は、明美との性交にいつも以上の強い快感はあったものの、「得体の知れない後味の悪さと、生まれて初めての懺悔の感情」が残る。これらのことから、彼は性に溺れるにしても、それだけの男ではないことが分かる。

その証拠として、彼はその後、「自分は母親の味を知らないのだ」と、「妙に寂し」(96)くなり、明美の寝顔を見ながら、高校二年生のときのこと―閉業した映画館でのデート―を思い出す。

やがて朝がきて明美が目覚め、二人は抱き合い、明美は「掌で刺青を撫でさすり、『こんなん入れて、アホやなア』と微笑んだ。」(99)元々、明美は竜一の刺青に触るのが嫌だった。しかし、彼女は竜一の刺青に触り微笑む。まさに彼女は母に近く、彼女なりに竜一を愛しているよう。それに対して、

竜一は明美の、痩せているのにそれだけは豊満な乳房に顔をうずめた。何年か昔の、あの廃墟の映画館に還って行った。棒状になった春の光。風もないのに揺れていた蜘蛛の巣。異臭をはなつ、こわれた客席。しみだらけの天井。積もった埃。明美の体温にくるまって、それらの光景の只中で立ちつくした。(99)

この竜一的心情は分かりにくい。彼は明美に包まれて、しかし、心は廢墟（映画館）の中で立ちつくしている。彼は、明美の「豊満さ」とは対照的な、自己の内面の荒廢ぶりに直面したのだろうか。いずれにしても、彼は（母になろうとした）明美によって救われなかった。だから彼は、明美に「俺、もうきよう限りで、ここにはけえへんで」（99）と言う。二度と来ないという点から考えると、淫蕩になった明美との性交による快感や、彼女が「母」と化した愛情よりも、その後に来た空虚感や罪惡感が強く、彼は耐えられなかったのだろう。

それは、帰宅後の回想——「明美に背中の刺青を撫でられたとき、竜一は自分という人間を見たのである。自分は、あの映画館とおんなじだ。ぞっとしながら、そう思ったのであった。」（101）——によって、より明らかにする。明美に自分の刺青を撫でられたとき、即ち、明美が竜一の「鏡」となったとき、彼は隠されていた自分の姿を見るのである。つまり、明美が母に、そして鏡に変じたとき、竜一は自分が廢墟の「あの映画館とおんなじだ」と思い、自己の「廢墟」にぞっとしたのである。

竜一は明美に、性欲の充足と母性を求めているのかもしれないが、明美は彼に、彼自身——充足しない空虚な自己——を見せる。故に、竜一は「鏡」となる彼女を避けるのだろうか。

竜一は明美によって、即ち、「おもちゃ」にして「母」たらしめる女と出会うことによって、己れの淫蕩さと空虚さを知らされる。確かに明美は竜一を愛していて、竜一の「おもちゃ」や「母」にもなろうとしたが、彼女は売春婦であり、金によって二人の関係は作られている。つまり、彼女の愛情は、金の上に成立している（売春）との限界がある。そして、竜一は快感以上に、かつ、彼女の与える「許し」（愛情）よりも罪の意識や懺悔の念を持ち、鏡たる明美によって内面の空虚を実感するのである。

五 その後の竜一

作品ではその後、明美は登場しなくなり、竜一の淫蕩ぶりも描かれなくなる。竜一の内面の空虚への救済（もしくは、その願望）は、光子との出会い（第六章）以降に先送りされる。

考えてみるに、竜一は女性に愛されたかったのではないか。それは実母の不在から始まり、現実には女たちから愛されていないことから推測できる。孤独な彼は、己の満たされないもの（愛情）を求める。彼の淫蕩さが前面に出て見えにくい、彼の快樂の果てにあるのは、自分が廃墟との実感であった。

彼のまともな恋愛を阻害するのは、彼の経歴や外見、そして性格（粗暴さ）や淫蕩さであり、その象徴として背中の刺青がある。やがて竜一は光子と出会い、刺青のことを愚痴る。すると、彼女は「刺青を取って下さい」（143）と言う。彼女の本気度は分らないにしても、刺青を取ることは恋愛・結婚への条件となり、彼は光子との恋に落ちる。彼の本気さは自分の性欲を押さえ、光子との関係を肉体レベルでも進展させなかったことから分かる。それは、女性への強い願望（愛されたいとの願望や結婚願望）と、四章での明美との体験による学習（淫蕩では満たされない空虚感）を経ての成長によると言ってもいいのかもしれない。

第四章は、淫蕩にして他者から理解されない孤独な男と、そんな彼を愛する女の物語である。しかし、女の愛情は感じられても、女を買春する男の空虚感が強すぎて、二人は別れるのである。

（注）

（1）本文の引用は、『宮本輝全集』13（新潮社 1993・4）による。（ ）内の数字は、全集のページ数である。

(2) 引用は、新潮文庫『夢見通りの人々』(1989・4)による。

(3) 客齋と言っても、三章に登場した村田時計店の英介と比べると、異常というほどの客齋ではない。竜一の父親は、肉の値段が「安かったら、売れるのは当たり前」と言いながらも、「息子たちが店を継いでから、確かに純益が増えたのを認め」(80)、相応の給料を息子たちに渡している。

また、後日のことであるが、光子と竜一が夜遅くスナックで会っているとき、スナックの外で、竜一たちを心配してたたずむ普通の父親である。